

島根・築山遺跡 つぎやま

- 1 所在地 島根県出雲市上塩冶町
- 2 調査期間 二〇〇五年（平17）一〇月～二〇〇六年三月
- 3 発掘機関 出雲市教育委員会
- 4 調査担当者 三原一将
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 中世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

築山遺跡は、出雲市街の南西を流れる神戸川東岸、標高九・三mの沖積地上に位置する。県道改良事業などに伴い、二〇〇三年から



（今市）

発掘調査を実施している。今回の調査では、溝・井戸・土坑・柱穴群などの遺構を検出した。出土遺物は一三世紀～一五世紀の土師質土器や龍泉窯系青磁・白磁・備前焼・瓷器系陶器などであり、多くの遺構は中世のものである。中世、本

調査区周辺には塩冶（神東）八幡宮が所在したと推定され、その様相を記述する『富家文書』に、大宮・若宮・神宮寺・舞殿・供御所などの八幡宮の施設のほか、別当・神主・供僧らの屋敷の名称が散見する。出土遺物に龍泉窯系青磁の酒会壺や白磁の四耳壺などの威信財があり、正方位を指向する方形区画溝が集中することから、遺構は上述の八幡宮に関わる施設の一部である可能性が高いと考えられる。

木簡は、調査区の北側に位置する長径約二・四m短径約一・三m深さ約一mを測る素掘りの不整円形土坑から一点出土した。相当量の湧水が認められることから、井戸・水溜の可能性はあるが、正確な機能は不明。木簡は、竹筒とともに真北に面し立てかけられたような状況で出土した。共伴遺物が細片で量も少なく、年代決定は難しいが、土坑上面を壊す溝から一五世紀後半の土師質土器が出土しており、土坑年代の下限はその時期と考えられる。

8 木簡の积文・内容

- (1) 南無牛頭天王 九々八十一
- 天□ 星
- 〔形カ〕
- (771)×73×10 019

板目材で、下端は切断、左右両辺は表裏から細かく面取りし整形する。形状は人形に似るが、上端折損のため原形は不明。「南無」

星」のあたりに最大幅をとり、「^ツ頭」字の六cm上が最も細くなる。

「^ツ頭」と並べて書かれた文字は「^{キリク}」に似るが、意味は不明。「牛頭」は、「牛」と「頭」の草書体とが一体として書かれたものと判断した。「天」字は、「天王」と「天形」とで筆跡が異なり、本木簡は複数の書き手による可能性がある。

内容としては、「牛頭天王」と「天形星」とを同一とする思想が「^ほ簠内伝」(二四世紀末成立)に見えることや、「九々八十一」が陰陽道の呪句とみられることから、陰陽道の色彩が強い呪符木簡と考えられる。冒頭には、胎藏界大日如来真言(アビラウンケン)を記すが、牛頭天王信仰の成立には密教が介在したとする指摘もあり、本木簡作成の背景を窺う上で興味深い。遺構が中世塩冶八幡宮に関連すると想定されることから、本木簡は八幡宮の供僧によるものである可能性が考えられる。

本木簡の形状は、新潟県下沖北遺跡出土の蘇民将来木簡(本誌第

二五号)に類似する。同木簡には「蘇民将来」の呪句の裏面に五芒星を象る墨点が見られ、陰陽道の影響を想起させる。本木簡の内容も陰陽道の色彩が強く、形状自体が陰陽道の思想に基づく可能性を指摘しておきたい。また、本木簡は呪符木簡としては長大なものであり、木簡の機能的な側面を更に考察する必要がある。

「牛頭天王」と記す木簡は、蘇民将来符に比して全国的に類例が少なく、「天形星」と併記する例は管見の限りでは見られない。本木簡は、中世における牛頭天王信仰の地域での広がりを考える上で、貴重な資料となるだろう。

なお、木簡の釈読にあたっては、大阪工業大学の井上寛司氏、大谷大学の豊島修氏、島根県教育庁埋蔵文化財センターの平石充氏からご教示を得た。

(高橋 周)

